

## 三陸の近景

⑬

### 田園風景

日中と朝夕の気温差が大きくなり、紅葉が待ち遠しい時季になりました。仙台から三陸へと移動する際に眺める北上山地の赤く染まった山肌の美しさは、毎年、心をホッとさせてくれます。

沿岸部の農地では、津波が襲った耕作地に4年ぶりに植えられた苗が無事成長し、一足先に黄金色になり頭を垂れている稲穂の刈取りが最盛期を迎えていました。きっと出荷されることでしょう。

この津波浸水域での稲作農業再開には、多くのハードルがありました。まずは、農地に残った瓦礫がれきを除去すること。さらには、海水の塩分が土に及ぼす影響が不透明なままで耕作して良いのかという

悩み。「土は何年もかけて育てるもので、作物より大切なんだ」と震災直後、農家の方に教えていただいた言葉は、今も心に残っています。

そして、刈り取り時に必要な専用の農機具のこと。「刈り取りに使う農機具をどのように調達すればいいのかわからないまま、見切り発車で田植えをしたんだ」と聞いた時、農家の方の熱意が胸に伝わってきました。

以前、津波で破壊されて山積みになった車の中に、農機具も多く含まれていたことを思

い出しました。

農業だけではなく、漁業を含め壊滅的な被害を受けた第1次産業に携わる方々の懸命な努力は私の想像を超えていました。

目の前に広がる黄金色の稲が作り出す美しい風景。その背後には大変なご苦労がありました。そのことを知ると、何も知らずに食べるだけだった私は何とも申し訳ない気持ちになりました。

(本願寺派総合研究所研究員・金澤豊)

